The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	被造物の都市 : ベンヤミンの『ナポリ』とバロック悲劇の関連性について
Author(s)	松尾, 匠
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 8, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92597
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

被造物の都市

―ベンヤミンの『ナポリ』とバロック悲劇の関連性について―

ドイツ文学　博士前期課程２年
松尾　匠

はじめに

本発表では、ベンヤミンの『ナポリ』のテクストを、当時彼が博士論文の題材として研究していたドイツ・バロック悲劇との関係から論じることを全体の目標とする。

『ナポリ』はベンヤミンがイタリア滞在時に執筆した紀行テクストである。しかし、先行研究[1]も指摘するように、単に彼が現地を訪れてそこをあるがままに描写したものの範囲に収まらない、バロック悲劇との関係を示唆するテクストである。

本発表では三つの章を設定する。以下、本論部分においてそれぞれの要旨を発表する。

１．

最初に、当時のベンヤミンの関心対象であったドイツ・バロック悲劇の特色について紹介する。これはベンヤミンが当時『ナポリ』とともに執筆していた博士論文である『ドイツ悲劇の根源』の内容に相当する。では、なぜベンヤミンは当時全く日に当たらないバロック悲劇についての研究を行ったのだろうか。それは、それ以前に研究の対象であった、彼独自の神学的な言語論を理論化する際の素材として用いようとしたためである。

彼が行ったバロック研究は多岐にわたるが、本発表で特に強調するのは神学的な意味においての「救済」という概念である。

ベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』にて、それぞれの劇においての特徴を述べた。その中でキリスト教聖史劇という中世以降行われてきた劇が、バロックの時代において世俗化の過程を経るといった特色を挙げた。[2]つまり、悲劇の内容が救済劇としての特徴を欠いた内在的なものに変質したと述べている。ベンヤミンはこのことを以下のように説明する。

「生成しつつあったバロック悲劇の形式のもつ表現力は、当時の神学的状況に含ま

---

[1] 大宮は『ナポリ』を「このテクストの発表時には既に頓挫していた教授資格申請のために書き上げられた論文『ドイツ悲劇の根源』の対象と方法を連想させずにはいない。」と分析している（大宮勘一郎『ベンヤミンの通行路』未來社 2007 年 p.37 より引用）。

[2] ベンヤミン、ヴァルター（川本二郎訳）『ドイツ悲劇の根源』、法政大学出版局 1975 年 p77。

れていた諸々の観想的必然性の発展したものと十分考えられるのである。その必然性の一つは、一切の終末論の欠落に必然的に伴うものであるが、聖寵の状態を断念して、単なる被造物の状態に立ち返ることの内に慰みを見出そうとする試みである。［中略］中世が世界のできごとや被造物のはかなさを救済の道程の宿駅として見せてくれるのに対して、ドイツのバロック悲劇は、現世の絶望的な状態の中に埋没したままである。［中略］宗教劇の終末論に背を向けたことが、ヨーロッパ全体の新しい演劇の特徴をなしている。にもかかわらず、恩寵に恵まれない自然の中へやみくもに逃げ込むのは、とくにドイツ的である。というのはヨーロッパバロック演劇の最高峰であったスペイン演劇では、バロック的な特徴が、カトリック文化の高い国において、はるかに絢爛と、はるかに顕著に、はるかに適切に展開されていったのであるが、このスペイン演劇は、被造物の恩寵のない状態における葛藤を、世俗化された救済力としての王権を取り巻く宮廷世界の中において、いわば遊びとして、縮小した形で解決するのである。」[3]

引用箇所は難解な文章であるが、このことはベンヤミンの初期の言語論に重ね合わせると理解することができる。次章において、ベンヤミンの言語論における、「恩寵の状態 Gnadenstand」、つまり「救済」に至る段階がどのように説明されるかを確認することで上記の引用の内容を解読したい。

２．

次に、ベンヤミンの初期の言語論を踏まえつつ、「救済」に至る段階というものを説明する。前章で述べたように、彼の劇研究は彼の初期の言語研究と類似の関係を持っている。

そもそも言語とは「神の言語」として無垢な状態として存在したというのが彼の言語論の出発点である。「神の言語」は無限で、神の命名においてこの世のあらゆる事物を指し示すことができる。そのような状態を「恩寵の状態 Gnadenstand」と言い、あらゆるものはそのような状態において存在していた。しかし、バベルの塔崩壊以降、言語は神によってバラバラにされ有限なものになる。それにより事物は神の命名による「恩寵の状態」から離れた状態、つまり「被造物の状態 Kreaturstand」としてこの世にとらわれざるを得ない状態になってしまう。そして最終段階として、「被造物の状態」から再び「恩寵の状態」に戻すことを、ベンヤミンが述べる最後の「救済」の段階と言うことができる。つまり彼の「救済」という概念は、神学的な言語論に基づくこのような段階を踏んだものとして解釈することができるだろう。

そのようなことを踏まえ、もう一度ドイツ・バロック悲劇との関係を確認したい。「聖

---

[3] ベンヤミン、ヴァルター（川本二郎訳）『ドイツ悲劇の根源』、法政大学出版局 1975 年 p.79-80。

寵の状態を断念して、単なる被造物の状態に立ち返ることの内に慰みを見出そうとする試みである。」とあるが、これは一体どういうことだろうか。先の言語論と照らし合わせると、本引用は「救済」への過程が踏まれていないということを指摘するものと解釈できる。このような観点から、ドイツのバロック悲劇は「救済」を断念した劇であると彼によって定義される。

３．

最後に、実際に『ナポリ』のテクストを例に、バロック時代における「被造物の状態」とは何なのかということを確認する。このことは同時に、『ナポリ』のテクストがいかにバロック悲劇との関連性をもって描かれているかということの論証にもなる。そして、本章でおける議論の補助線の役割を果たすのは、「内在性」と「超越性」という概念の二項対立である。これはまた「俗」と「聖」、あるいは「此岸」と「彼岸」といったものと言い換えることができる。そして先の理論に照らし合わせると、「被造物の状態 Kreaturstand」と「恩寵の状態 Gnadenstand」と言い換えることができるだろう。

バロック時代において特に強調されるのは、「聖」なるものが「俗」化するという現象である。このことは冒頭の教会に関する箇所で確認できる。

> „Vor einigen Jahren wurde ein Priester, unsittlicher Vergehungen halber, auf einem Karren durch die Straßen Neapels gefahren. Unter Verwünschungen zog man ihm nach. An einer Ecke zeigte sich ein Hochzeitszug. Der Priester erhebt sich, macht das Zeichen des Segens, und was hinter dem Karren her war, fällt in die Knie. So unbedingt strebt in dieser Stadt der Katholizismus aus jeder Situation sich wiederherzustellen. Verschwände er vom Erdboden, dann zuletzt vielleicht nicht aus Rom, sondern aus Neapel.“[4]

> 「数年前、一人の司祭が公序良俗に反する行いのせいで、荷車に乗せられてナポリの通りを引き回された。呪いの言葉を浴びせながら彼の後ろをついていった者もいる。ある角で、婚礼の行列が見えた。司祭は身を起こし、祝福のしるしを作る。そして、荷車の後ろにいた者たちは跪いた。絶対的にこの街では、カトリシズムがどのような状況でも復元する方向に進むのである。カトリシズムが地上から姿を消すのは、最後はおそらくローマではなくナポリである[5]。」

引用箇所での出来事は、最も「聖」なる存在である司祭が、最も「俗」なる行為によ

---

[4] Benjamin, Walter : *Neapel.* In : Tiedemann,Rolf und Schweppenhäuser, Hermann(Hg.):*Walter Benjamin Gesammelte Schriften Band IV・1.* Frankfurt am Main 1981 p.307.

[5] 訳は発表者の拙訳。なお『ベンヤミン・コレクション３　記憶への旅』に収録されている「ナポリ」（浅井健二郎訳）の訳を参考にした。

って刑に処される場面である。しかし、本文中の謎とも思えるカトリシズムの力は健在である。本引用箇所は、『ドイツ悲劇の根源』における世俗化の理論に対応する。つまり、本来超越的な存在である教会は、バロックの時代において内在化するといったことを表す。『ナポリ』においては、どのような超越的な存在も全て被造物（現世）の悲しみにとらわれた状態であると示しているのである。しかし、内在化した教会権力は「彼岸に至る直接の道が閉ざされているような一つの世界を支配する」[6]ようになるのである。バロック時代は、超越性への道が断念されるがゆえに、中世的な教会の権力が再び息を吹き返した（反宗教改革）時代であると述べている[7]。

『ナポリ』がバロック悲劇たる類似性を持つもう一つの理由が、徹底的な現世利益的な描写が数多く見受けられることである。それは『ナポリ』という都市＝舞台上で繰り広げられる即興の芝居を意味する。『ナポリ』に登場する様々な人物は、今を生きる即興の役者として登場する。そのことは『ナポリ』が神の恩寵から離れた救済されない被造物たちの場であることに相当する。

このことを『ドイツ悲劇の根源』では遊戯概念という語を用いて説明する。「世俗劇が、［中略］超越の一歩手前で止まらなければならないとすれば、それはまわり道をして、遊びとして、超越を確認しようとしているのである。」[8]とあるように、バロックの世界において、被造物の「悲しみ Trauer」の状態に置かれることと「遊戯 Spiel」は表裏一体の関係として現れる。

被造物の状態にあることは超越的な「救済」を約束されない「悲しみ Trauer」の世界にたたずむことである。しかしそれは「遊戯 Spiel」という観点から新たに見直すことができることをベンヤミンは示唆している。

おわりに

本発表ではバロック悲劇の特色を確認し、ベンヤミン初期の言語論を踏まえたうえで、『ナポリ』のテクストを読み解いていった。このテクストをバロック悲劇との類似性をもって解釈することで、「被造物の状態 Kreaturstand」にとらわれた都市という観点から視線を投ずることができる。ならば、『ナポリ』のテクストは一切の救済が訪れないテクストなのかといえばそうでもない。むしろ「被造物の状態 Kreaturstand」にとどまることで、新たな救済の可能性を残していることをベンヤミンは示唆しているが、そのことについてはまた別の機会に譲らざるを得ない。

---

[6] ベンヤミン、ヴァルター（川本二郎訳）『ドイツ悲劇の根源』、法政大学出版局 1975 年 p.78。
[7] 同上、p.77。
[8] 同上、p.80-81。